

ICID 協会巻頭言

—第3回世界水フォーラムに向けて—

ICID 協会会長：谷山重孝

世界で最も水が不足している地域は北アフリカと中近東だ。とりわけ北アフリカは深刻だ。増産しようにも灌漑に使用する水が無い。そのため、農業生産は人口の伸びに追いつかず、穀物の大輸入国になっている。1998年のデータによると、エジプトは、小麦の輸入量が世界第1位（日本は第4位）で、734万トン、トウモロコシが第5位（日本は第1位）で、304万トンとなっている。リビアはデータが無いので分からないが、アルジェリア、チュニジア、モロッコも同じような状況である。これらの国々は、降雨が少なく、灌漑が無ければ農業生産が不可能な国である。人口が少ない間は自給できていたのが、人口増加によって輸入に頼らざるを得なくなった。しかも、今後も大幅な人口増加が予測されるため、輸入量は更に増加するだろう。このような状況から、イギリスロンドン大学のトニーアランは、“これらの国々は、将来の増加人口を養うため、更に穀物輸入を増やさなければならないが、穀物生産には生産量の1000倍の水が必要なので、穀物輸入は形を変えた効率的な水の輸入でもある”としている。このような乾燥地域では、水は肥料や農薬と同様に農産物生産に必要な経済財として考え、穀物よりも収益性の高い農産物の生産に用いる方が合理的だ。

1997年、北アフリカの国のモロッコ（マラケシュ）で、21世紀の世界の水問題を討議する第1回世界水フォーラムが開催された。開催国がモロッコであることから、水フォーラムの軸は乾燥地にあり、フォーラムは、水を経済財として考える国がリードしてきたと考えざるを得ない。ところが世界にはこれと全く違う水利用している国々がある。言うまでも無くそれはモンスーンアジアの国々だ。この地域の水田灌漑は、世界の全水使用量の約半分を利用する巨大水ユーザーだ。ここでは、水田農業が経済だけでなく、国の社会文化の基礎となってきた。もしも、経済性だけで水田農業が存在するなら、日本の米作りはいくら手厚い保護があるとしても、とっくに壊滅していただろう。同じことは、韓国、台湾でも言える。この2国は、日本の後を追って経済発展し、それとともに水田面積が減少している。最近、経済発展が目覚ましいタイ、マレーシアでも、既に、水田農業の比較生産性は他産業に比べ劣っている。もし、単純に水を経済財として扱えば、これらモンスーンアジアの水田農業は、試練の場に立たされ、場合によっては瀕死の状況になるだろう。

2003 年、第 3 回世界水フォーラムが日本で開催されるが、日本は、アジアモンスーン地域の特殊性を世界に示すべきだと思う。そのような意味もあり、“モンスーンアジア水田灌漑の多面的な役割”をテーマとしたプレシンポジウムが天津市で 3 月 20 日、21 日開かれた。会議には、アジアを中心とした 11 カ国、4 国際機関の専門家・学者が参加し、多面的役割について発表、議論し、共通の認識を得た。今まで、モンスーンアジアの水田農業は、アジアにおいても正しく理解されていなかったように思う。そのため、水の考え方は、絶対的に不足する北アフリカ中近東、工業用水や都市用水にのみ使うヨーロッパ諸国の意見が主流になってきた。モンスーンアジアの社会文化のアイデンティティーを守り、世界の水と食料の問題に貢献するため、水田稲作社会の水利用の意義を世界に示す絶好のチャンスとしたいものである。